アングル Angle

浅草「映画弁士塚」に名を遺す
われらが母校の先輩「藤浪無鳴」

「映画弁士塚」と、同塚に刻銘されている「藤浪無鳴」の筆者による拓本

映画弁士は無声映画時代（明治後半から昭和初年頃まで）の花形職業だった。映画ストーリーの説明と役者の科白まで声色で巧妙に語ったから、弁士の弁舌演技は俳優役者よりも遥かに高く評価される芸能だった。

＊

天下随一の話術名人と言われ、多芸多才で終戦後の芸能界をリードした徳川夢声が「むかし私が活動弁士の頃、先生として敬慕していたのは藤浪無鳴でした」と語る。

藤浪無鳴とは芸名で本名は原真平。信州飯田追手町で小牧場を経営し牛乳配達も営んでいた原家の長男。賢い子で長姫城跡に新築移転の郡立飯田中学校4回生に進学した。

＊

英語と国語の成績が同学年のトップになり鼻高々だったが、理数科とくに数学は肌に合わず期末試験では常に友人の援助で通過し、いよいよ卒業の5年生になった。

そんなある日、不意打ちの数学試験があり原真平は絶体絶命。マルで降参！とテスト用紙に大きなマル印を描いて提出。

これがたまたま虫の居所が悪かった数学教師の逆鱗に触れた。さんざ説教の末に「今回のお前の態度と行動は停学あるいは退学処分にも該当するぞ！」「ああ、わかりました。そうなら俺は自分のほうから退学願いを出します」

売り言葉に買い言葉。カッとなった原真平は帰宅して父親に胸中の思いを告げ、かねて憧れの東京を目指して旅立った。

＊

あれから10年。活動弁士・藤浪無鳴が東都で名声をなしたと知って飯田の新聞も映画館も大騒ぎ。大正4年3月「藤浪無鳴君帰省大興行」の広告で米国映画「カルメン」と戦劇「忘れぬために」の2本立て若松座で上映は南信新聞社が主催。大正15年6月には「藤浪無鳴君伊太利視察記念、映画界革命の第一声を飯田町で」と派手なトップ記事にしたのは主催の信濃時事新聞社。

英語の読解力と日本語の説明力の素晴らしさで高名映画館から主任弁士として引っ張り蛸だった大正年間の藤浪無鳴こと原真平だった。

＊

浅草の浅草寺境内にある映画弁士塚は昭和33年、新東宝大蔵貢社長が映画界の協賛を得て盛大な除幕式を行った。若い活弁士だった我が人生を愛しみ懐かしみ、同時代の弁士仲間たちの名を網羅して石に刻み残そう！。毀誉褒貶を浴び賛否両論を受けた実業家だったが、南信州清内路育ち・大蔵貢の偉業遺産である。

牧内雪彦（中47・高1回）

＊村沢武夫著「伊那の芸能」及び原家と親戚だった水野都沚生（中27回）の「思い出」を参考にしました。